

自分の事として聞く

江戸時代末期に活躍された真宗大谷派の名僧・香樹院徳龍（1772 ~ 1858）師に次のような逸話が残されています。

.....

徳龍師が昌平黌（幕府の学問所）の総長をしておられた林大学頭と会見されたことがありました。ひとしきり会話が弾んだ後、大学頭が次のようなことを言ったそうです。

「私は聖人の教えによって修養につとめる儒者でありますから、今更地獄極楽の喩え話で勸善懲悪を説く仏教は必要ではありません。けれども、世の中には無知文盲の者もたくさんいることから、そういう人たちのためには仏教も随分役に立つことでしょう。どうかご自愛の上、しっかり世の中のために尽力ください」

大学頭としては、これではほど好意的な意見を述べたつもりだったのかも知れません。ところがこの言葉を聞いた香樹院は、キッと形を改め、こう言われたそうです。

「お言葉ではありますが、地獄極楽は決して喩え話ではありません。極楽のことはさておき、少なくとも地獄とは、他ならぬあなたのようなことを考えている人たちの墜ちるところであると、私はかねがね聞いております」

大学頭はこの言葉に大いに感ずる所あり、以来、香樹院師のお説教を真剣に聴聞されたと言われています。後に香樹院師は、「よき弟子を設けたり」と仰られたそうです。

.....

いわゆる識者と呼ばれるような人は、よく世の中の道義の退廃を嘆いて、仏教の必要性を語ることがあります。ところがどういう訳か、そういう人に限って自分では仏法を聞こうとしません。これは仏教の本質を理解していないからだと思えます。

仏法を聞く上で何より大事なことは、あくまで自分の事として聞いていくということです。自分が問題にならなければ、地獄極楽もただの喩え話になってしまいます。特に、お念仏の教えは他ならぬこの私が救われる道を説いています。

なぜ救われねばならないのか？

それは今、現に私が迷っているからです。

ところが私たちは「自分は迷っている」という自覚はありません。それどころか、「自分は正しい。自分は間違っておらん」という我執を軸に、他を裁くことしかしない、そんな愚かな迷いの生活を続けているのです。

だからこそ、この教えを自分の事としてしっかりと聞いていく必要があるのです。

仏法を聞くというのは、阿弥陀さまの智慧の目に見抜かれた私を聞いていくということです。

平たく言えば、ごまかしのきかぬ目の前に座るということです。

「たとい他人はごまかせてもこの仏は見抜いておるぞ」という仏さまの前に座るということです。そうすることによって初めて「迷っているのは他にもないこの私であった」ということに気づかされるのです。

親鸞聖人は

「いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定住みかぞかし」(『歎異抄第2条』)
と仰っています。

つまり「どんな立派な行ないも出来ないこの私(親鸞)は、地獄以外、行き先はありません」と告白されているのです。

「地獄」とは、親鸞聖人が仰るように、今、現に作りつつある私の行ない(因)の結果(果)として生じる世界のことをいうのです。

昔の歌に次のようながあります。

火の車 作る大工は無けれども
己が作りて己が乗りゆく

火の車(地獄)を作るような大工はいないけれども、自分が作って自分が乗っていくという歌です。

つまり地獄とは自分が作って自分が墜ちていく世界ということなのです。

ですから、客観的にながめて、地獄は有るか無いかと議論するようなものではなく、今この私が何を作っているか、そのことを問うていくべきことなのです。

地獄には閻魔大王えんまがいて、獄吏ごくりにとして赤鬼、青鬼がいると言われます。

閻魔とは自分を是よしとして他を裁く心です。

赤鬼は燃え上がる瞋恚しんに(怒り)の心です。

青鬼はあくなき貪りむさぼ(貪欲)の心です。

はたしてそんな心はどこにあるのでしょうか。それは他にもありません、私の心そのものです。

そのところを、親鸞聖人は次のように述べられています。

凡夫というは無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く、怒り、腹立ち、嫉みそねみ、ねたむ心多くして、臨終の一念に至るまで、止まらず、消えず、絶えず (『一念多念証文』)

いのち終るまでこの煩惱の束縛から脱け出ることが出来ないと仰っているのです。

まさに「地獄は一定すみかぞかし」です。

この私の姿は、阿弥陀さまの智慧に見抜かれることによって気づかされる私の姿なのです。

それは、「お前は迷うておるぞ。地獄に墜ちるぞ。そのことに早く気づけよ」という私の目覚めを促す阿弥陀さまの言葉であります。

この厳しいお言葉を頂く時、私の心に唯々「お恥ずかしいことです」という慚愧ざんぎの念が生まれます。

そうしてさらに大事なことは、この言葉の裏には、「だからこそ、救わずにはおれないんだよ」という阿弥陀さまの慈悲の心はたらいているということです。

阿弥陀さまは、地獄一定の私の姿を見抜く（智慧）ことによって、「おお可哀そうに。見捨ててはおけない。救わずにはおれない」という心（慈悲）を起されるのです。

真実の智慧には必ず慈悲が伴うのです。

この阿弥陀さまのお心（慈悲心）を頂く時、私の心に「ありがたいことです」という^{かんぎ}歡喜の念が生まれます。

「^{ざんぎ}慚愧と^{かんぎ}歡喜」、この二つの念^{おも}いが念仏者の心に同時に起こるのです。

これは、「救われるはずのない身」だと知ること（慚愧）と、「救わるる身」だと知ること（歡喜）が、一人の人間に同時に起こるということです。

救われるはずのない者が救われる、ここに、一人漏らさず救うという阿弥陀さまの救いの法のまことに優れたところがあるのです。

こうして念仏者は「慚愧と歡喜」の念^{おも}いを持ちながら、どこまでも謙虚でしかも喜びにあふれた人生を送っていくのです。

まさに、それは仏法を自分の事として聞いていくことによって実現する人生です。

平成28年2月 「光明寺だより91号」より